

いわゆる質形容詞の非過去形と過去形について

福嶋 健伸

キーワード：質形容詞、テンス、特性、直接的経験、
一般化、認識論的な対立、具体的な時間

要 旨

質形容詞の場合、発話者が非過去形で発話するか、過去形で発話するか、自由に選択できるという現象がある。また、テンスの問題とは別に、両形の選択が自由に行えないという現象もある。本稿ではこれらの現象に統一的な説明を与えるため、認識論的な観点を導入した。具体的には、直接的な経験か、それを一般化させたものかという点から、非過去形と過去形を大きく二つに分けて考察を進める。

〈A 直接的経験をあらわす非過去形〉と〈B 直接的経験をあらわす過去形〉はテンスにおいて対立し、〈C 一般化された非過去形〉と〈D 一般化された過去形〉の対立も、条件付きではあるが、テンスにおいて対立する。しかし、〈B 直接的経験をあらわす過去形〉と〈C 一般化された非過去形〉の対立は、テンスの対立ではなく、実際は認識論的な対立である。そのため、基本的に、〈B 直接的経験をあらわす過去形〉と〈C 一般化された非過去形〉は、両者の選択が可能となる。また、選択不可能な場合も、認識論的観点から説明ができる。

0. はじめに

本稿の質形容詞の定義は荒(1989)に従う。荒氏の定義を簡単にまとめると、質形容詞とは、述語の位置にあらわれて、特性をあらわす形容詞のことである。例えば、「大きい」「きれいだ」「深い」などがそうである。また、ここでいう特性とは、簡単にいってしまえば、具体的な時間にしばられることのない、人や物の、内的あるいは外的な特徴である¹⁾。

本稿の考察は、この質形容詞全体をカバーしているわけではない。以下に考察の対象から外したものをあげる。非過去形で禁止の用法をもつ「だめだ」、具体的な時間に、認識したととらえることが難しい「好きだ」「嫌いだ」、評価的な意味しかもたない「よい」「わるい」、また、「ない」も今回は考察の対象から外している²⁾。また、本稿では会話文を扱うことにする³⁾。

1. 問題の所在と本稿の目的

絶対テンスという概念は、発話時を基準として、動作、状態、特性等がそれより前であるか、後であるか、同時であるかをあらわす文法的なカテゴリーである。質形容詞は形態的に発話時より前の特性を過去形であらわし、発話時より後の特性や、発話時と同時の特性を非過去形であらわす。

したがって、発話時においては、非過去形で発話すべきか過去形で発話すべきかすでに決定されていることになる。そのため、テンス対立を有しているのならば、基本的に、非過去形と過去形を自由に選択できるということはないはずである。しかし、(01)や(01)'のような現象がある。

(01) 「(略)自慢するわけじゃないけどね、あのシーンはよくできてたよ。リアルだった。そう思わない？」

「そうだな」と僕は言った。「リアルだ。たしかに」

(ダンス・ダンス・ダンス・上)

(01)' 「(略)自慢するわけじゃないけどね、あのシーンはよくできてたよ。リアルだ。そう思わない？」

「そうだな」と僕は言った。「リアルだった。たしかに」

(01)の例は、同じ映画のワンシーンについて、二人の人間がコメントしているものであるが、一人は過去形、もう一人は非過去形で発話している。これを(01)'のように過去形と非過去形を置換しても、さほど不自然ではない。この例は、ある場合においては、非過去形と過去形が選択可能であることを示している。(01)や(01)'の過去形と非過去形の関係をテンス的対立と考えると、なぜ、両形の選択が可能なのか説明がつかない。

また、以下の例を見られたい。

(02) (発話時に北極にいない場合の)「北極は寒いよ」⁴⁴

(02)' (発話時に北極にいない場合の)「北極は寒かったよ」

(03) (映画の主演女優について発話時に彼女を見ていない場合の)「彼女はきれいだよ」⁴⁵

(03)' (映画の主演女優について発話時に彼女を見ていない場合の)「彼女はきれいだったよ」

(04) (発話時に妹を見ていない場合の)「僕の妹はきれいだよ」

(04)' (発話時に妹を見ていない場合の)「僕の妹はきれいだったよ」

(02)と(02)', (03)と(03)'の例は、(01)と(01)'の例と同様、非過去形と過去形のどちら

らを使用して、談話レベルで大きな違いはみられない⁶。これらの場合、発話者は、非過去形と過去形のどちらかを自由に選択できるようである。しかし、(04)の例を(04)'のように過去形にしてみると、「妹はすでにきれいではない」ということを含意してしまう。このため、(01)(02)(03)の例と違い、非過去形と過去形を自由に選択できるとはいえない。(04)の場合、発話時に妹を見ているわけではない。したがって、妹を見たのは、発話時以前であって、テンス的には、過去形を使用できるはずである。それにもかかわらず、非過去形でしか発話できないのは、なぜだろうか。

また、この現象と逆のことが、(05)と(05)'についていえる。

(05) 「(おれが)あいつに勝つのは、けっこうむずかしかったよ」

(05)' 「(おれが)あいつに勝つのは、けっこうむずかしいよ」

(05)のような例を(05)'のように非過去形で発話しづらいことがある。(05)の場合は、「あいつに勝った」ということを含意する場合もあるが⁷、(05)'の場合はそうはいかない。なぜ、(05)のような場合は、過去形と非過去形の選択が自由にできないのであろうか。

本稿の目的は、これらの諸問題に統一的な説明を与えることである。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1. 先行研究

形容詞のテンス形式に関係する先行研究は、いくつかあるが、質形容詞の非過去形と過去形のみに着目して書かれた論文は、管見の限りない。そこで、いわゆる状態形容詞と質形容詞双方を考察した研究をとりあげる。高橋(1986)⁸では、「形容詞のテンスの特徴は、アクチュアルな状態をあらわすばあいにはみられる非過去形と過去形の対立と、特性をあらわすばあいにはみられるテンス的意味をもたない非過去形という、ふたつのあらわれかたがあることである。」と結論づけている。また、高橋(1986)では、非過去形、過去形のどちらでも使用できる場合について、「その特性を、過去の特定時にアクチュアルに成立したものととらえるばあいには過去形になるし、成立の時間的な側面をきりすてて、特性をあらわすばあいには非過去形がつかえるからである。」という見解を出している。本稿では、この見解を参考にする。次に荒(1989)をまとめてみる。荒(1989)では、「私はうれしい」「私はかなしい」などは、時間的なありか限定⁹があり、状態¹⁰をあらわす状態形容詞であるとしている。これら状態形容詞は、「私はうれしかった」「私はかなしかった」のような過去形と、現在と過去とで対立すると述べている。また、「北極は寒い」「彼女はきれいだ」などは、時間的なありか限定がなく、特性をあらわす質形容詞であり、時間外的なのであるが、その特性主が消失したばあい、もしくは、その特性に変化があるばあいは

過去形を採用するとしている。そして、樋口(1996)では、「状態形容詞と質形容詞との対立は、認識論的な観点からみれば、経験と経験の一般化との対立ということになるだろう。」と述べている。また樋口氏は、この考え方が、「赤い」「寒い」等の自然現象をさしめず形容詞を考えるとときに有効であるとしている。樋口(1996)では、直接的経験とその一般化という概念を、状態形容詞と質形容詞の対立を考察する際に用いている。本稿では、樋口氏のこの考え方を応用させ、直接的経験とその一般化という概念を、質形容詞の非過去形と過去形を大きく二分する際に使用する。

2.2. 本稿の立場

本稿では、質形容詞の非過去形と過去形をそれぞれ、大きく二つに分け、直接的経験とその一般化という認識論的観点を導入する。次にみる(06)(07)(08)のような非過去形は、発話時の直接的経験を述べるものであり、したがって、「寒さ」「きれいさ」「たくましさ」を認識した具体的な時間は、発話時に限定されている。そこで、本稿では、これらをくA 直接的経験をあらわす非過去形と呼ぶことにする。

(06) (発話時に北極にいて、北極の寒さを直接経験している場合の)

「北極は寒いよ」

(07) (発話時に主演女優を見て、彼女のきれいさを直接経験している場合の)

「彼女はきれいだよ」

(08) (発話時に太郎を見て、太郎のたくましさを直接経験している場合の)

「太郎はたくましいよ」

また、(02)(03)(09)は、過去において直接経験した「寒さ」「きれいさ」「たくましさ」を一般化させたもので¹¹、「寒さ」「きれいさ」「たくましさ」が、ポテンシャルにそなわっているものと発話者は考えている。したがって、これらは認識した具体的な時間にしばられていない。よって、本稿では、これらをくC 一般化された非過去形と呼ぶことにする。

(02) (発話時に北極にいない場合の)「北極は寒いよ」¹²

(03) (映画の主演女優について発話時に彼女を見ていない場合の)「彼女はきれいだよ」

(09) (発話時に太郎を見ていない場合の)「太郎はたくましいよ」

過去形の場合も同様に、(10)(11)(12)も過去の直接的経験について、述べているもので、それらを認識した具体的な時間にしばられていると考えることができる。よって、これらをくB 直接的経験をあらわす過去形と呼ぶことにする¹³。(02)・(03)・(05)等もここに分類される。この過去形は、特性の変化を含意しないため、非過去形に置換することもできる。

(10) (称子さんに会ってきた人の発話として)

「称子さんはきれいだったよ」

(11) (「太郎ってどんな人？」等の問いに対して)

「太郎はたくましかったよ」

(12) (北極から帰って来た人の発話として)

「北極は寒かったよ」

また、(13)(14)は、直接的経験を一般化させた過去の特性について述べたもので、過去においては、「きれいさ」「たくましさ」は、ポテンシャルにそなわっていたと考えられる。特性に変化がおこったため、過去形を採用しているだけである。つまり、直接的な経験を一度一般化しているという点は〈C 一般化された非過去形〉に共通する。このような過去形を、〈D 一般化された過去形〉と呼ぶことにする。

(13) (きれいだったが、死んでしまった人について)

「彼女はきれいだったよ」

※きれいだということに変化がおきた。

(14) (昔、筋骨隆々であったが、今は病弱な太郎について)

「太郎はたくましかったよ」

※たくましいということに変化がおきた。

本稿では、具体的な時間にしばられているか、いないか、つまり、直接的経験か、それを一般化しているか、ということと、非過去形か過去形か、ということから次の図のように位置づけて考察をおこなう。

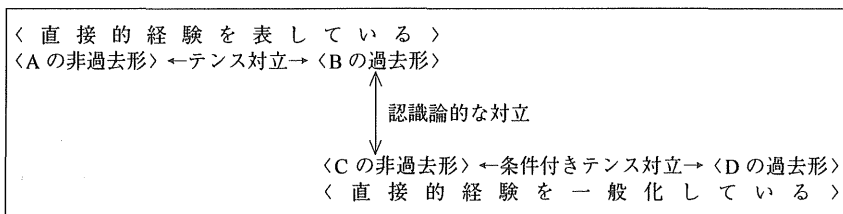


図1

3. 〈A 直接的経験をあらわす非過去形〉と〈B 直接的経験をあらわす過去形〉について

〈A〉の非過去形と〈B〉の過去形は基本的にテンスにおいて対立している。〈A〉の非過去形は、(06)(07)(08)のように、発話時において直接的経験中の非過去形である。実例

だと、(15)(16)(17)のようなものが、ここに分類できる。

(15) 車の中で大声で怒鳴り、博正は千歳空港に向かった。

平八郎と久美子の乗った飛行機は十五分遅れて着いた。

「さすがに北海道は寒いねェ」

平八郎は博正を見るなり言った。

(優駿・下)

(16) 「ライターが落っこっちゃった」

「どこだい？」

と立って来る。

「あの——くぼみの奥。ごめんなさいね」

「深いな。手が届くかな」

(殺人よ、こんにちは)

(17) 「最新流行のビニールのハンドバック、一個正価八百円」

「おーお、高いな」

(潮騒)

このような直接的経験中の場合に、過去形を採用することは、原則的にはできない¹⁴。このような非過去形は、時間が経てば、〈B〉の過去形を採用する。(18)(19)(20)をみられたい。

(18) (北海道から、帰って来た人が)

「さすがに、北海道は寒かったよ」

(19) (ライターをくぼみに落とし、なくしてしまった翌日)

「ライター、くぼみに落っこしちゃってさ。そのくぼみ、すごく深かったよ」

(20) (買い物から帰ってきた人が)

「最新のハンドバック、高かったよ」

これらの例はすべて、「寒さ」「深さ」「(値段の)高さ」を直接経験した具体的な時間があり、その具体的な時間にしばられていると考えられる。〈A〉の非過去形と〈B〉の過去形はテンスにおいて対立しているため、両形を選択することはできない。原則的には、直接的経験中なら非過去形で、直接的経験後なら過去形で発話することになる。

4. 〈C 一般化された非過去形〉と〈D 一般化された過去形〉について

〈C〉の非過去形と〈D〉の過去形も基本的に、テンスにおいて対立していると考えられる。しかし、両者は条件付きテンス対立である。〈C〉の非過去形は、直接的な経験を一般化したものであり、具体的な時間にしばられていない。実例でみると以下のようなものである。

- (21) 「俺もオートバイに乗りたいな」
「オートバイは高いよ」 (海の方こうで戦争が始まる)
- (22) 「うん。アメリカの兵隊さんね、とつても勇ましいの。機関銃をダダダ・・・と撃つとね、敵がバタバタ死ぬんだよ」 (氷点・上)
- (23) 「(略)妹の器量を誉めるのもおかしいが、あんな顔立ちはちよいと珍しいね」
(刺青・秘密)¹⁵

(21)(22)(23)において、発話者は常に、「高い」「勇ましい」「珍しい」ものとして考えている。これらの例は、「(値段の)高さ」「勇ましさ」「珍しさ」を認識した、具体的な時間を限定してとらえていない。過去の直接的経験を一般化させたものである。これらは、現在の特性について述べている、典型的な例だと考えられる。

しかし、これらの形容詞が、過去形を採用しないということではない。荒(1989)に指摘があるとおり、その特性を帯びているものが消滅したり、その特性に変化があった場合は、過去形を採用できる。事例でみると以下のようなものである。

- (24) 「あの人昔、おかしかったのよ。」 (杏子)
- (25) (ルーズベルトはすでに死んでいる。) ※()内は福嶋
「(略)だけどルーズベルトは臆病だった。(略)」 (葡萄と郷愁)
- (26) (アンドレアは、すでに死んでいる) ※()内は福嶋
「アンドレアは、ガーボルと親しかったわね」
とアーギは訊いた。 (葡萄と郷愁)

これらの例は、発話時以前にその特性が変化している、ということを含意する。つまり、過去の特性という意味で過去形を採用しているのである。逆をいえば、発話時以前にその特性が変化しているという条件がなければ、過去形にはできない。(24)(25)(26)の例は特性の変化があるため、非過去形にかえると非常に不自然である¹⁶。

- (24)' ?? 「あの人昔、おかしいのよ。」
- (25)' (ルーズベルトはすでに死んでいる。)
?? 「(略)だけどルーズベルトは臆病だ。(略)」
- (26)' (アンドレアは、すでに死んでいる)
?? 「アンドレアは、ガーボルと親しいわね」
とアーギは訊いた。

つまり、<D>のような過去形を採用するためには、≪特性がすでに変化している¹⁷>という条件が必要なのである。

また、繰り返すことになるが、本稿では、これらは過去の特性をあらわしていると考えられる。そのため、この「おかしかった」「臆病だった」「親しかった」は、その特性が変化する前は、常に「おかしい」「臆病だ」「親しい」ということであって、それを認識した具体的な時間にしばられているものではない。直接的な経験を一般化させたものである。(27)(28)をみられたい。

(27)「彼女は美しいよ」

(28)(死んだ人について)

「彼女は美しかったよ」

(27)は〈C〉の非過去形の例であり、発話時において、発話者は常に「美しい」と考えているものである。(28)は〈D〉の過去形の例であり、美しいということに変化があったものの、過去においては常に「美しい」という意味である。このように両者は条件付きではあるが、テンスにおいて対立すると考えられる。テンスにおいて対立している故、非過去形と過去形を自由に選択できない。原則的に、その特性に変化がなければ非過去形で、発話時以前に変化があれば、過去の特性として、過去形で発話する^{*18}。

5. 〈B 直接的経験をあらわす過去形〉と〈C 一般化された非過去形〉について

〈B〉と〈C〉は見かけ上、過去形と非過去形の対立をなしている。しかし、実際には、過去対非過去というテンスの対立ではなく、過去の直接的経験か、それとも、その直接的経験を一般化させたものか、という認識論的な対立をなしている。

〈B 直接的経験をあらわす過去形〉の典型的な例は、(10)(11)(12)である。これらを非過去形にしたものが〈C 一般化された非過去形〉の例である。

(10)(称子さんに会ってきた人の発話として)

「称子さんはきれいだったよ」

(11)('太郎ってどんな人?')等の問いに対して)

「太郎はたくましかったよ」

(12)(北極から帰って来た人の発話として)

「北極は寒かったよ」

(10)'(称子さんに会ってきた人の発話として)

「称子さんはきれいだよ」

(11)'('太郎ってどんな人?')等の問いに対して)

「太郎はたくましいよ」

(12)'(北極から帰って来た人の発話として)

「北極は寒いよ」

例えば、(10)の場合を考えてみる。「柊子さんはきれいだった」という場合、発話者が、彼女を見たのは過去のことである。そのため、過去形が採用されている。このように考えれば、〈C〉の非過去形と、過去対非過去というテンス的な対立をなしているのとらえることもできるであろう。しかし、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の関係をテンスにおいて対立していると考えることが、果たして、妥当なのだろうか。

〈B〉の過去形は〈A〉の非過去形との対立において、テンス対立という文法的概念を成立させている。その意味では、〈A〉の非過去形なくして、〈B〉の過去形は存在しえない。同様に、〈C〉の非過去形は〈D〉の過去形との対立においてテンス対立を実現させている。もし、仮に、〈D〉の過去形の存在を認めなかったとすれば、〈C〉の非過去形は、非過去というテンス的な意味をあらわすことができず、むしろ超時間的ということになるだろう^{*19}。

このように、〈A〉の非過去形と〈B〉の過去形、〈C〉の非過去形と〈D〉の過去形の関係は、ともに、一方が存在しなければ、もう一方も成り立たないという関係である。このように相補的な関係であることが、テンス対立の前提であるとするならば、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の関係にテンス対立という概念をあてはめることは、適切ではない。仮に、〈B〉の過去形が存在しなくても、〈C〉の非過去形は非過去の意味をあらわすことができるし、また逆に、〈C〉の非過去形が存在しなくても、〈B〉の過去形は過去の意味をあらわしているからである。また、(01)と(01)'にみられるように、両形を置換させても、談話レベルで大きな違いを生ぜず、発話者は両形を自由に選択できる。この現象も、テンス対立という関係に矛盾している。

それでは、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の関係は、何の対立ととらえるべきなのか。本稿では、この両者を過去の直接的経験か、それを一般化させたものかという、認識論的な点において対立していると考え^{*20}。

直接的経験後であり、かつその特性に変化がないという条件下であれば、発話者は過去の直接的経験として発話するか、それを一般化させたものとして発話するかを選択できる。そのため、形の上では、過去形と非過去形の両形が使用できるのである。

(10)(11)(12)と(10)'(11)'(12)'を比べてみても、談話レベルで大きな違いを生まない。これは、両者が過去と非過去というテンス的な対立ではなく、直接的経験とその一般化という認識論的な対立をなしているからである。過去形と非過去形を置換させても、談話レベルで大きな違いを生まないのは、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形だけである。つぎは実例でみてみよう。

- (29) 「九月になったら、八丈島に行って潜ってみようぜ。先週西伊豆へ行ったけれど海の中はじつにきれいだったよ。ああいうきれいな海の中のような人生をおくりたいものだよ」 (岳物語)
- (30) 「神戸なんてつまらない所だなあ」と松村が言った。「収容所もつまらなかった」 (蒼氓)

これらの例も(29)・(30)のように非過去形に置換しても文脈上不自然ではない。

- (29)′ 「九月になったら、八丈島に行って潜ってみようぜ。先週西伊豆へ行ったけれど海の中はじつにきれいだよ。ああいうきれいな海の中のような人生をおくりたいものだよ」
- (30)′ 「神戸なんてつまらない所だなあ」と松村が言った。「収容所もつまらない」

このような過去形と非過去形の対立は、直接的経験とその一般化という認識論的な対立であるため、お互いに入れかえても不自然ではないのである。このような現象は、発話者が、具体的な時間にしばられた過去の直接的経験として、〈B〉の過去形で発話するか、あるいは具体的な時間にしばられていない現在の特性として、つまり、過去の直接的経験を一般化させたものとして〈C〉の非過去形で発話するか、選択できるために起こる現象であると説明できる。

このように〈B〉の過去形、〈C〉の非過去形、どちらも発話可能なのは、両者がテンスにおいて対立しているのではなく、直接的な経験かその一般化かという認識論的な対立をなしているからである。直接的な経験として発話するか、それを一般化したものとして発話するかは、基本的には、発話者の自由である。そのため、過去形、非過去形の選択ができるのである。また、繰り返すことになるが、過去形と非過去形を交代させて、不自然でないのは、〈B〉の過去形と、〈C〉の非過去形だけである。この事実も、他の対立とは違うということを示している。

しかし、常に〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の両形を選択できるわけではない。先の(04)と(04)′、(05)と(05)′にみられるように、場合によっては選択の余地がないこともある。これも、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の対立を、過去の直接的経験か、それともそれを一般化させたものか、という認識論的な対立であると考えると説明ができる。そこで、I・IIという原則をたてて、考察してみる。

- I 含意をあらわす場合や直接的経験を強調したい場合は、〈C〉の非過去形を選択すると不自然である。

以下の実例をみてみよう。

- (31) 「(略)いろいろややこしい筋が絡んでいる。ホットなんだよ。だから、聞き出すのはけっこうむずかしかった」 (ダンス・ダンス・ダンス・上)
- (31)' 「(略)いろいろややこしい筋が絡んでいる。ホットなんだよ。だから、聞き出すのはけっこうむずかしい」
- (32) 「明後日だぞ。いいな。水着とサングラスとパスポートだけ持っていきゃあいい。あとは買えばいい。簡単だ。シベリアに行くわけじゃない。シベリアはきつかった。あそこはひどい。(略)」 (ダンス・ダンス・ダンス・下)
- (32)' 「明後日だぞ。いいな。水着とサングラスとパスポートだけ持っていきゃあいい。あとは買えばいい。簡単だ。シベリアに行くわけじゃない。シベリアはきつい。あそこはひどい。(略)」

(31)は「聞き出すのは難しかったけれど、結局は聞き出すのに成功した」ということを含意する文であるが、(31)'のように<C>の非過去形にしてしまうとその含意が消えてしまう。むしろ、逆に「聞き出すのは不可能に近い」という方に解釈されるだろう。また、(32)からは、発話者が直接シベリアに行った、というニュアンスが読みとれるが、(32)'だとそのニュアンスは薄れてしまう。つまり、これらの場合にはの過去形と<C>の非過去形の両形を自由に選択できるというわけではない。

(31)(32)のような例は、具体的な過去の直接的経験に発話の焦点があるため、一般化できない、もしくは一般化しづらい、と説明できる。

この逆がⅡということになる。

Ⅱ 常に一般化されて認識されているものは、の過去形を選択すると不自然である。

- (23) 「(略)妹の器量を誉めるのもおかしいが、あんな顔立ちはちよいと珍しいね」 (刺青・秘密)
- (23)' 「(略)妹の器量を誉めるのもおかしいが、あんな顔立ちはちよいと珍しかったね」
- (33) 「親友の太郎はかしこいよ」
- (33)' 「親友の太郎はかしこかったよ」
- (34) 「僕はみにくいよ」
- (34)' 「僕はみにくかったよ」

自分のことや身近な人のように常に一般化されて認識されているものは、の過去形で発話すると不自然である。(23)と(23)'、(33)と(33)'、(34)と(34)'をそれぞれ、比べて

みると明らかに違いがあり、両形を自由に選択できるとはいえない。

(23)'(33)'(34)'の過去形は、〈D〉の過去形として解釈され、(23)'の場合、妹の器量がすでに悪くなっているか、妹が死んでいるかして、器量が珍しいという特性がすでに変化しているということを含意する。同様に、(33)'の場合も、太郎はすでに賢くないか、死んでいるということを含意する。(34)'も同様に違いがでてくる。そのため、発話者は〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形を自由に選択することができない。自分や身近な人などに過去形を採用すると、基本的には〈D〉の過去形の解釈がでやすくなり、その特性がすでに変化している、ということを含意してしまうからである。

これは、自分のことや身近な人のことは常に経験していることなので、一回一回の具体的な直接的経験としてとらえることができず、常に一般化されたものとして認識されているためと説明ができる。そのため、〈B〉の過去形を採用することができず、〈C〉の非過去形を採用するのである^{*21}。

これらの現象は、〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形の対立をテンス的対立ととらえていては説明ができない。直接的経験とその一般化という、認識論的な対立を考慮にいれて、初めて説明できることなのである。

6. まとめと課題

本稿で述べてきたことをまとめると次のようになる。〈A 直接的経験をあらわす非過去形〉と〈B 直接的経験をあらわす過去形〉の対立は、基本的にはテンスの対立であり、両形を入れ替えて発話すると不自然である。また、両者とも具体的な直接的経験について述べているもので、具体的な時間にしばられている。

〈C 一般化された非過去形〉と〈D 一般化された過去形〉の対立は、その特性がすでに変化しているという条件を必要とするテンスの対立である。両形を入れ替えて発話すると不自然である。また、両者とも具体的な直接的経験を一般化させたことを述べているので、具体的な時間にしばられていない。

〈B 直接的経験をあらわす過去形〉と〈C 一般化された非過去形〉の対立は、テンスの対立ではなく、直接的経験かその一般化かという認識論的な対立である。基本的に、両形を自由に選択できるのはそのためである。また、認識論的な対立であるが故に、含意をあらわす場合や直接的経験を強調したい場合は、〈C〉の非過去形で発話すると不自然であり、逆に、常に一般化されて認識されているものは〈B〉の過去形で発話すると不自然になる。

このような現象を説明するためには、本稿のように非過去形と過去形をそれぞれ二つに分け、認識論的な観点を導入することが適切であろう。直接的な経験かその一般化かという認識論的な対立と考えることで、「問題の所在」でとりあげた諸問題に統一的な説明が

与えられるからである。

以下に課題をあげる。まず、本稿で取り上げた問題が、意味論の中に位置するものなのか、語用論の中に位置するものなのか、検討する必要がある。本稿では、〈D〉の過去形を採用するときは、特性の変化という条件が必要であるとした。しかし、(35)の例をみてほしい。

(35) 「昔、父は背が高かった。そして、今でも父は背が高い。」

このような例が許容されるとするならば^{*22}、特性の変化という条件は、必ずしも、必要であるとはいえない。つまり、〈D〉の過去形の中に、特性の変化という意味を読み込めないということになる。しかし、それと同時に、「妹はやさしかった」「お父さんは背が高かった」等のような過去形での発話を聞くと、(妹やお父さんが死んでしまったとか、性格が変わってしまったとか、背が低くなってしまったなどの理由で)「やさしい」「背が高い」等の特性が変化したと考えてしまうのも事実である。この事実から考えると、例えば「部屋が暑い」という発話から窓を開けることを類推する程、場面に依存しているレベルではないということになる。

今の段階では、本稿で取り扱った問題は、プロトタイプ的な意味論でもなければ、プロトタイプ的な語用論でもない、ちょうどその中間あたりにある問題である、としか言及できない。本稿で取り扱った問題をどのように位置づけていくかが、今後の課題であるといえよう^{*23}。

また、本稿の考察対象から外したのもも考えていく必要がある^{*24}。それと同時に、この認識論的な考え方が、どの程度名詞述語文に適用できるかを検討することも課題である^{*25}。もし、名詞述語文のふるまい方が、質形容詞と同じであれば、本稿の問題は質形容詞の問題としてではなく、品定め文の問題として、とらえ直す必要があるだろう。

注

- *1 特性については、奥田(1988)、樋口(1996)を参照。
- *2 これらの形容詞は基本的な枠組みがはっきりしたあとで考察する。また「だめだ」「よい」「わるい」「ない」などが、質形容詞であるかどうかの詳しい検討は本稿ではしない。
- *3 会話文の中でも、発話者がある物語をかたり始めて、小説の地の文に近くなっている場合は除く。
- *4 自然な会話文となるように、作例の場合はすべて終助詞「よ」をつけた。
- *5 普段きれいではない女性が、結婚式などで、一時的にきれいになる場合があるが、本稿では、そのような場合は考察の対象としない。
- *6 形態が違うので、意味のレベルでは違いがある。
- *7 「けっこう」「かなり」等の副詞をいれると「勝った」という含意が読みとれる。しかし、これらの副詞をいれず、以下のようにすると「勝った」という含意はやや、読みとりづらくなる。

・「(おれが)あいつに勝つのはむずかしかったよ。」

- *8 高橋(1986)では、質形容詞ではなく、性質形容詞という用語をもちいている。
- *9 この「時間的なありか限定」という用語は、荒(1989)の中で使用されている用語である。
- *10 本稿における状態の規定は、奥田(1988)に従う。奥田(1988)の規定は「《状態は、ひとつひとつの物が、ある時間的なありかのなかで、一時的に採用する、その物の存在のし方である》」というものである。奥田(1988)によれば、「この《状態》という用語でよばれる出来事は、いちいちの、具体的な物につきまどって生じてくる現象である。しかも、かぎられた時間帯のなかに一時的に生じてくる現象である。したがって、一般化がゆるぎされない。「人間は足がいたむ」という、いい方は成立しない。」ということになる。また、特性との違いについて、同論文では「物にそなわっている、正常な状態は、恒常的な物の特徴として、《特性》のカテゴリーのなかにひろいあげられるだろう。」と述べている。
- *11 直接的経験とその一般化の概念については、樋口(1996)参照。
- *12 私達は実際に北極に行ったことがなくても、伝聞等の知識により、「北極は寒いよ」と発話することができる。しかし、「北極は寒かったよ」と発話できるのは、実際に北極に行って、その寒さを直接経験した者だけである。本稿では、伝聞による「北極は寒いよ」等の非過去形は扱わない。
- *13 このような過去形の使用は高橋(1986)で指摘されている。
- *14 (地球を見ながら)「やっぱり地球は青かった。」と発話できる。また、(自分の母親の若い頃の写真を見ながら)「若い頃のお母さんはきれいだった。」と発話できる。発見、確認、思い出し等のムード的な用法であれば、過去形を採用できるということである。
- *15 正確には、この用例は新潮文庫の『刺青・秘密』におさめられている、「異端者の悲しみ」という短編のなかのものである。
- *16 (24)・(25)・(26)のような文も、現在から、そのような特性があったという判断を下している場合であれば、不自然ではない。過去の出来事に対して現在から判断や評価等を下す場合、「過去の出来事」ということから、過去形を採用することもあるし、「現在からの判断」ということから、非過去形を採用することもある。この使い分けの原則はまだ明らかにされていない。以上の理由から、本稿ではこのような場合を考察の対象から外している。また、過去に判断・評価等を下した場合であれば、過去形を採用する。これらの諸問題は今後の課題であるといえる。同様の指摘は高橋(1986)にもある。
- *17 正確には、「《その特性が変化している》もしくは《変化しているかもしれないというある程度の懸念がある》という条件」とすべきかもしれない。
- *18 「一万年前の北極は寒かった」等の文からは、やはり、特性の変化という含意がよみとれる。もし、北極の寒さに変化がなかったとすれば、「一万年前の北極も寒かった」という文にすべきであり、「も」によって、特性の変化という含意を取り消す必要があるだろう。
- *19 ここでは、「超時間的」という用語を、具体的な時間にしばられていないという意味ではなく、はじめから時間軸上にはないという意味で使用している。
- *20 対立という用語が適切であるかどうかの検討は必要である。「直接的経験」と「一般化」という概念は、認識論的対立と考えて差し支えないだろう。しかし、その中の要素である〈B〉の過去形と〈C〉の非過去形をとらえて、直接的経験とその一般化の対立といえるか疑問である。現段階では、一応、対立であると考えている。
- *21 Iの制約とIIの制約のどちらが強いのかという問題については、本稿では検討しない。
- *22 筆者自身は、(35)のような例は非常に不自然であると考える。過去形のカードは全部で約850例集めたが、(35)のような例はなかった。
- *23 本稿では一応意味論の中に位置づけておく。

*24 「～たい」「～ほしい」等に関する諸問題も今後の課題である。例えば、「～たい」に関する問題として、少なくとも、以下のものがあげられる。

・「あの時、あいつに勝ちたかった。(だから、おれはがむしやりに攻撃して勝利をおさめた。)」

上の例の場合、この「勝ちたかった」は過去のある時点における発話者の感情と考えてよいだろう。

しかし、試合に負けている人が、

・「あの時、あいつに勝ちたかった。」

と発話した場合、この「勝ちたかった」は過去のある時点における発話者の感情なのか、過去の出来事に対する発話者の現在からの判断なのか、はっきりと区別ができない。

また、以下の場合などにみられる「勝ちたかった」をいずれも同じタイプとして考えてよいのか、それとも、区別して考えべきなのかという問題もある。

・「ずっと、あいつに勝ちたかった。(そして、やっと今日、勝利をおさめた。)」

・「ずっと、あいつに勝ちたかった。(今回こそ勝ってやる。)」

・「ずっと、あいつに勝ちたかった。(しかし、あいつと戦うことはもうない。おれは、あいつに負けっぱなしだ。)」

・「ずっと、あいつに勝ちたかった。(今となっては、どうでもいいけどね。)」

*25 名詞述語文の中で、以下のように、経歴等を次々と述べていくときは、認識論的な考え方があてはまらない場合もある。

・(現在中学校三年生の担任をしている先生の発話で)

「十年前は二年生の担任だった。八年前は一年生の担任だった。六年前は三年生の担任だった。

四年前は二年生の担任だった。そして、今また、三年生の担任をしている。」

この場合、「六年前も三年生の担任だった。」のようにわざわざ、「も」をつける必要がないのである。

参考文献

荒 正子(1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』むぎ書房

奥田 靖雄(1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」『国語国文8』宮城教育
大学(松本泰丈編『日本語の研究の方法』むぎ書房 再録)

奥田 靖雄(1988) 「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94、95

奥田 靖雄(1993) 「動詞の終止形(1)」『教育国語』2・9

奥田 靖雄(1994) 「動詞の終止形(2)」『教育国語』2・12

奥田 靖雄(1996) 「文のこと——その分類をめぐって——」『教育国語』2・22

北原 保雄(1984) 『日本語文法の焦点』教育出版

金水 敏(1990) 「『報告』についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版

金田一 春彦編(1976) 『現代日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

工藤 浩(1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』403

工藤 真由美(1987) 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91

工藤 真由美(1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』むぎ書房

工藤 真由美(1995) 『アスペクト・テンスとテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ
書房

佐久間 鼎(1941) 『日本語の特質』育英書院(1995年、くろしお出版から再版)

- 鈴木 重幸(1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木 重幸(1979) 「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた完成相の叙述法
断定のばあい——」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房
- 鈴木 泰(1992) 『古代日本語のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』ひつじ書房
- 高橋 太郎(1983) 「スルともシタともいえるとき」『金田一春彦博士古稀記念論文集』三省堂、
(『動詞の研究』むぎ書房 再録)
- 高橋 太郎(1985) 『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
- 高橋 太郎(1986) 「形容詞のテンスについて」『日本語研究(一)現代編』明治書院、(『動詞の研究』
むぎ書房 再録)
- 寺村 秀夫(1971) 「‘タ’の意味と機能」岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と
日本語問題』くろしお出版、(『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 再録)
- 寺村 秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 西尾 寅弥(1979) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 西尾 寅弥(1985) 「形容詞慣用句」『日本語学』1月号
- 野田 尚史(1991) 『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 樋口 文彦(1996) 「形容詞の分類——状態形容詞と質形容詞——」『ことばの科学7』むぎ書房
- 細川 英雄(1988) 「現代日本語形容詞語彙一覧稿」『金沢大学教養部論集人文科学篇』24-2
- 細川 英雄(1989) 「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158
- 森山 卓郎(1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森田 良行(1968) 「動作・状態を表わすいい方」『講座日本語教育』4
- 森田 良行(1983) 「日本語の形容詞について」『講座日本語教育』16
- Bolinger, Dwight(1967) "Adjective in English" *Lingua* 18

(1997年8月31日 受理)